

ご感想、情報は・Eメール life@sankei.co.jp  
・FAX 03-3270-2424

# 医療

# 広がるグルタチオン点滴療法

手足が震えるなど高齢者に多い進行性の難病、パーキンソン病の治療に、抗酸化物質のグルタチオンを点滴で投与する「グルタチオン点滴療法」が静かに広がっている。健康保険が適用されず、治療費が自己負担の自由診療となるが、根本的な治療法がない中で、震えを改善したい患者の選択肢となっている。

## 根治療法なく

「一時は字も書けず、症状が進めば歩けなくなると聞かされ、とてもショックでした」

東京都の主婦、加茂律子さん(71)は平成24年暮れ頃から手足が震えて握力が弱くなり、脳梗塞ではないかと病院に駆け込んだ。検査の結果、脳に問題はなく、25年2月に「パーキンソン病の入り口」と診断された。

パーキンソン病は手足が震えたり、動きが遅くなったりなどの症状がみられる。症状が徐々に進行し、かつては寝たきりになると思われるようになった。根本的な治療法は開発されておらず、症状を緩和する薬物療法などがとられていた。

診断だけでもショックだった

## パーキンソン病の手足の震えを改善



点滴を受ける患者  
＝神奈川県鎌倉市の「スピークサロンメディカルクリニック」

た加茂さんに、追い打ちをかけたのが医師から発せられた「100歳までは生きないから、10年か20年歩ければいいよね」との言葉だった。処方された薬を飲んでも震えが止まらず、「人生をエンジョイするために、治せるものなら

治して元気になりたい」と治療方法を探した加茂さんは、義妹から紹介されたグルタチオン点滴療法を選んだ。

週2回、点滴に通い、ももんの震えが止まり、字もきれいに書けるようになった。「タクシーしたり駆け出ししたりで

風邪の症状の基本は「のど・鼻・せき」と前回書きましたが、もう一つ重要なものが抜けています。「熱」です。熱は風邪の時に最もよくある症状の一つです。ただ、のど・鼻・せきの症状に、熱が加わると、診察する医師はちょっと焦ります。重症な病気の確率が高くなるからです。

## 風邪症状で熱があるときは要注意

に似た全然別の重症な病気もあるからです。

風邪から始まる重症な病気に肺炎があります。肺炎は日本人の死因の第3位で、最近特に関心が高まっている病気の一つです。確かに肺炎は怖い病気ですが、甘く見るとひどい目にあいます。

実際にどんな時に肺炎を疑うかというと、のどの痛みや鼻の症状が軽いにもかかわらず、せきがひどい、たんが多くなります。ただ、せきやたんがひどいときでも、熱がなければ、少し安心です。風邪というよりは少しこじれて気

## 家庭医が教える 病気のはなし

80

ある場合もあります。このときも「風邪をひいたんです」と受診される人が多いですが、これは風邪らしくありません。女性であれば尿の通り道に細菌がつく「腎盂腎炎」を疑い、背中や腰の痛みを、男性であれば「前立腺炎」を疑い、頻尿など尿症状についてチェックします。

寒気がひどく、ガタガタ震えがきた後に熱が出た、というのもちょっと怖い症状です。単なる熱より重症の病気の可能性が高くなるからです。

まとめのおきましよう。のど・鼻・せきの症状でも、せきが一番ひどくて、熱が続くようなら肺炎が心配です。のど・鼻・せきの症状がないにもかかわらず熱が出たときは風邪でない可能性を考えます。熱だけではなく、寒けと震えを伴うような場合は重症な病気の表れかもしれません。

大人の場合、風邪にみえる病気で熱があるときは要注意です。

【武蔵国分寺公園 名郷直樹】  
【クリニック院長 名郷直樹】

き、重い荷物も持てます。友達と泊まりかけて神戸まで旅行もできました」と喜ぶ。

## 少ない副作用

グルタチオン点滴療法は、パーキンソン病患者の脳でグルタチオンが減少している点に着目した療法で、週1、2回点滴を行う。グルタチオンは日本では肝臓病などの治療に使われるが、パーキンソン病治療薬としては健康保険が適用されておらず、あまり知られていない。自由診療のため、料金は医療機関によって1回8千円から2万円と幅がある。

元杏林大教授で、日本にこの療法を導入した「スピークサロンメディカルクリニック」(神奈川県鎌倉市)の柳沢厚生理事長「写真」によると、米国では、広く行われて



特集 死に場所選び 活本  
特 死に場所選び 活本  
ト リ ても わかる 社 葬  
産 経 新 聞 出 版 終 読 本  
ソ ナ エ  
冬 号  
¥840+税

## 「希望のバッグ」届けます

血糖を下げるインスリンが体内でつくれなくなる病気で、小児期の発症が多い1型糖尿病の患者や家族を支援するNPO法人「日本IDDネットワーク」(佐賀市)が、発症初期の患者向けに、病気の特徴をまとめた冊子や生活に役立つ道具を語めた「希望のバッグ」の無料配布を始め

## 糖尿病初期患者を支援

日本初の取り組みとしており、井上龍夫理事長は「医師から『一生治らない』と宣告されて絶望のどん底にいる患者らが、このバッグで生きる希望を持ってくれれば」と話している。



大阪市立大病院で患者親子に「希望のバッグ」を手渡す日本IDDネットワークの井上龍夫理事長

いる。副作用は、遺伝的に低血糖になりやすい人でまれに起きるといふ。

日本の認知度は低いが、全国で200以上のクリニックで受けられる。柳沢理事長が主宰する医師・歯科医師の研究会でアンケートを実施したところ、約6割の患者に有効だったと回答があった。

柳沢理事長は「誰にでもすぐに効果が出るわけではないが、副作用が少ないので試す価値はある。患者の生活の質が少しでも改善できれば」と話している。

## 高齢化で増える患者数

パーキンソン病の患者数は、日本では人口10万人当たり100~150人と推定されている。50~60代に発症することが多く、高齢化に伴い患者数は増加傾向にある。厚生労働省が3年に1回実施する患者調査によると、総患者数は平成8年に13万1000人だったが、23年には14万1000人に増えた。

同法人によると、1型糖尿病は生活習慣との関連が強い2型と異なり、認知度は低い。国内の年間発症率は10万人当たり1.5~2人。根治のための効果的な治療法がなく、患者は生涯、注射などでインスリンを補う必要がある。

井上理事長らが平成24年6月、米国の1型糖尿病の研究支援団体を視察。同様のバッグを配っていることを知り「日本版」をつくらうと約1年前に準備を始めた。

バッグはリュックサック型で赤と黒の2色から選べる。冊子のほか、保護者が学校や幼稚園で病気への対応を説明する際、相手が理解しやすいよう要点をまとめたパンフレットや、万が一の際に救急隊員が患者であることを一目で判別できるストラップを用意。

血糖測定器や注射器をしまつポーチも入れた。

無料配布の後も情報提供などのケアを続ける。問い合わせは同法人、☎0952・200・2062。